

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 5 日現在

機関番号：13801

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2016

課題番号：25381019

研究課題名(和文) 教員養成の質の向上における学校支援ボランティアの意義の再検討と支援システムの構築

研究課題名(英文) Reconsideration of the Significance of School Support Volunteer and Build Support System in Improving the Quality of Teacher Training

研究代表者

菅野 文彦 (Fumihiko, Sugano)

静岡大学・教育学部・教授

研究者番号：30216288

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、教員を目指す学生による「学校支援ボランティア」の意義を各種調査によって再検討したうえで、「学校支援ボランティア」の質保証に資する支援システムを構築した。具体的にはまず、質問紙調査のデータを分析することで、「学校支援ボランティア」の実施実態や課題を明らかにし、振り返りの重要性を指摘した。次に、振り返りを充実させるために「振り返り評価シート」を作成し、これを用いた振り返り会を実施して、その成果と課題を検証した。

研究成果の概要(英文)：This study reconsidered the significance of "school support volunteer" by students aiming at school teachers through various investigations, and constructed a supporting system to contribute to the quality assurance of "school support volunteer". Specifically, firstly, this study clarified the actual condition and the problem of "school support volunteer" by analyzing the data of questionnaire survey and pointed out the importance of reflection. Secondly, this study made an "evaluation sheet" to help reflection enrich and verified its outcome and problem by carrying out a reflection meeting using this sheet.

研究分野：教育学

キーワード：学校支援ボランティア サービス・ラーニング 学校インターンシップ 教員養成 省察 振り返り

1. 研究開始当初の背景

教員養成の「高度化」や「質保証」を目指した政策が矢継ぎ早に打ち出される今日、国主導の教員養成制度改革に対しては、教員養成のステレオタイプ化・矮小化や、カリキュラムの統制強化等に繋がる可能性が指摘されている。我が国の教員養成制度は、課程認定を通じて国家の制約を受けており、「高度化」や「質保証」を目指した政策もまた、国家基準の枠組みを強化する方向性をもつことが想像できる。一方で、教員を取り巻く学校環境や教員の労働市場は地域によって異なることから、教員養成を担う大学が立地する地域のニーズ（例えば教育委員会との連携など）にもとづき、地域性に応じた改革も同時に求められる。そしてこの点にこそ、多様な大学がそれぞれの自律性を発揮した教員養成の「高度化」や「質保証」の糸口が見いだせるのである。

そこで注目されるのが、各大学が独自に企画・実施している「学校支援ボランティア」である。教員養成系大学・学部を中心に全国で実施されている「学校支援ボランティア」は、量的発展を遂げるとともに質的多様性を内包しながら現在に至っており、実践研究の蓄積は数多くある。一方で事例を報告した研究が中心であることから、「学校支援ボランティア」に関する全国的動向やその課題が俯瞰的に考察されている研究は僅少である。上述のように「学校支援ボランティア」が大学の自律性を発揮させた教員養成の「高度化」や「質保証」の一部として期待されるならば、全国的な活動の動向を把握し、現状の各活動に共通する成果や課題を整理した上で、教員養成の質の向上における「学校支援ボランティア」の意義を再検討し、より良い活動を生み出すための支援システムの構築が求められるだろう。

2. 研究の目的

上記の背景から、本研究では、全国の教員養成系大学・学部および静岡大学教育学部（以下、本学部）で実施されている「学校支援ボランティア」の実態を量的・質的調査によって明らかにした上で、その意義を再検討し、ボランティアの質を保証する支援システムを構築・検証することを目的とする。具体的には、「実態の把握」、「効果の分析」、「意義の再検討と支援システムの構築」という3つの観点から、以下の6点を検討する。

(1) 「実態の把握」

教員養成系大学・学部の「学校支援ボランティア」に共通する成果や課題、特徴ある実践等を把握する。

学校・教育委員会の受け入れ姿勢、学生へのニーズ、活動の課題など、「学校支援ボランティア」を受け入れる側の実態を明らかにする。

(2) 「効果の分析」

学生が「学校支援ボランティア」を経験することによる影響を検討し、教員の予期的社会化プロセスにおける学校現場体験の意義や課題を明らかにする。

若手教員が学生時代に「学校支援ボランティア」を経験したことで、自身の教育実践の遂行に与えた影響を明らかにする。

(3) 「意義の再検討とシステムの構築」

上記(1)および(2)の結果を踏まえ、「学校支援ボランティア」を経験することの意義について再検討し、教員養成の質の向上における「学校支援ボランティア」の役割・位置づけを明らかにする。

これらを踏まえ、「学校支援ボランティア」を効率的・効果的に進めるための、振り返り会やWebを利用した支援システムを構築し、運用するとともに、システムの評価を行い、得られた知見を明らかにする。

3. 研究の方法

上記の目的を達成するため、本研究では「実態の把握」、「効果の分析」、「意義の再検討と支援システムの構築」という3つのフェーズにわけて、以下のような方法を用いて研究を進める。

(1) 「実態の把握」

関連する先行研究を整理した上で、申請者らがすでに実施している全国の国立教員養成系大学・学部を対象とした質問紙調査を再分析し、さらに個別大学への聞き取り調査を実施することで、「学校支援ボランティア」の共通する成果や課題、特徴ある実践等を把握する。

「学校支援ボランティア」を受け入れている学校・教員を対象とした質問紙調査や、教育委員会への聞き取り調査を実施することで、学校・教育委員会の受け入れ姿勢や学生へのニーズ、ボランティア活動の課題を把握する。

(2) 「効果の分析」

「学校支援ボランティア」として派遣された学生を対象とした聞き取り調査によって、学生の教職志望動機、教職への構え、教員に必要とされる資質能力の変化を把握する。

「学校支援ボランティア」として派遣された経験をもつ若手教員を対象とした聞き取り調査によって、ボランティア経験が就職後の教育実践や資質能力の形成に与える影響を把握する。

(3) 「意義の再検討とシステムの構築」

関連する先行研究、および上記(1)と(2)の結果を踏まえ、「学校支援ボランティア活動」の意義について再検討し、教員養成の質の向上における学校支援ボランティアの成

果と課題、今後の改善方策等について明らかにする。

学校支援ボランティアを効率的・効果的に進めるための「学校支援ボランティア活動支援システム」の構築を行う。振り返り会では、上記の各種調査で得られた知見をもとにして「評価シート」を作成し、振り返り会で活動し、その効果を検証する。Web システムでは、ボランティア活動の振り返り機能、教員とのコミュニケーション機能などを持たせ、一定期間運用した後、その成果を検証する。

4. 研究成果

「実態の把握」、「効果の分析」、「意義の再検討と支援システムの構築」という観点から本研究の成果を示すと、以下のとおりである。

(1) 「実態の把握」

調査を行った 2012 年度時点では、ほぼすべての教員養成系大学・学部が「学校支援ボランティア」やそれに類する活動を実施していた。まず管理・運営について、多くの場合は教育委員会ではなく、教員養成系大学・学部あるいはその所管するセンター等の責任によって行われていた。また、ボランティア先として頻度の点で群を抜いていたのが公・私立の小学校であり、活動期間は多様であったが半年以上の定期的な参加が最多であった。さらに、活動内容は授業時の学習支援だけではなく、行事や放課後の学習その他の支援全般に及んでいた。このように活動の体制や内容などは、各大学・各地域ならではの多様性を受容している。その中でも共通した特徴を見出すとするならば、小学校を中心とした継続的・定期的な活動が展開されているといえよう。加えて、大学での指導の状況等について、ボランティアへの参加条件の有無、単位認定の有無は、ともにほぼ相半ばしていた。多くの大学・学部で、専任教員らによる事後指導や振り返り会が行われ、広報・募集・登録、連絡、振り返りなどを中心に Web を活用する大学・学部も半数を超えていた。しかし Web 活用に関してはまた、管理者の継続的維持などの課題も見いだされた。

(2) 「効果の分析」

まず、参加学生にもたらす効果には、「子ども理解の深まりと教育技術の習得」、「学校の実態に対する理解」、「大学の授業と関連した学習への発展」、「参加学生同士の学び合い」が挙げられた。ボランティアで子どもと関わったり、授業を観察したりすることにより、学生は「子ども理解の深まりと教育技術の習得」や「学校の実態に対する理解」を成果として実感していた。また、大学での授業と学校現場との実践を往復させることで、教育実習や卒業論文の執筆に活かすことができるなど、「大学の授業と関連した学習への発展」へとつながっていた。さらに、振り返

り会などによって自分自身の活動を省察し、それを学生同士でディスカッションすることで、自分とは異なる見方や捉え方ができるようになるなど、「参加学生同士の学び合い」にも成果を感じていた。

一方で、訪問活動の課題には、「活動先の教員とのコミュニケーションの取り方」、「継続的な活動を原因とするモラルの低下」が挙げられた。「活動先の教員とのコミュニケーションの取り方」では、活動先の教員と話す時間が取れず、活動がやりっぱなしになってしまうなどの課題が示された。「継続的な活動を原因とするモラルの低下」では、活動がルーティン化することによって、取り組みが受け身になってしまい、訪問活動による学習の成果が乏しいものになってしまうことが指摘された。そのため、活動をより豊かな学びへと発展させるためには、活動を通して体験したことを振り返る機会を確保することと共に、学校現場で振り返るための体制を確立することが必要であるといえる。

(3) 「意義の再検討とシステムの構築」

先行研究および各種調査の結果から、「学校支援ボランティア」を再検討すると、従来の“ボランティア”論で学校現場体験活動を進めていくことの限界が明らかとなった。1990 年代以降の教員養成政策では、教員の資質能力向上、とりわけ学校現場で求められる実践的指導力の育成という観点から、教員養成段階におけるボランティア活動が求められ続けてきた。本研究の調査等によって、各大学の活動で“ボランティア”という名称が数多く使われている実態が明らかとなったが、このことは、学生の「自発性」に対する願いや期待が少なからず込められている結果と受け止めることもできる。しかしながら“ボランティア”を前面に押し出して学生の学びを構築しようとするれば、結局のところ、「参加の自発性」(自由意思にもとづく参加)と「裁量の自発性」(活動に関する裁量の自由度)をいかに担保するかという議論に終始してしまう。学校教育として導入する以上、まずは「自発性」の限界を認めることで、学校現場体験活動に準備されている多様な学びの機会に気づくことができる。

また、本研究の成果をもとにしたシステムの構築では、静岡大学教育学部を事例とした実践を行った。まず、教育実践学専修が大学付近の公立小学校をフィールドとして実施している「訪問活動」(継続的な学校現場体験活動)において、活動後に学生が大学で行う振り返りの Web 導入を試みた。振り返りでは、個人が活動で経験した内容なそこで学んだことなどを Web 上の個人ページに日記として書き込み、大学教員がその内容を確認して参加者全員が閲覧可能な状態として、それぞれの日記を読み合い、情報交換を行った。学生が自分自身の経験を即時的に言語化し、それを広く共有することに成果がみられた

一方で、Web システムの管理運営やスマートフォンによる記入の手間など、継続性に関する課題も見いだされた。

次に、附属教育実践総合センターが窓口となっている「学校支援ボランティア」で活動する学生を対象に、定期的に大学で実施している「振り返り会」では、研究の成果を活用して「評価シート」を開発・導入した。「振り返り会」では、学生が自分の活動や学びを言語化するための「評価シート」を事前に記入したうえで、自分自身の活動や学びを振り返る個人省察と、様々な活動を行っている学生同士が交流する協働省察、学校現場の経験豊かな実務家教員による助言・指導という段階を設けている。この「評価シート」は、学生がボランティアとして教員の仕事の一部を経験する中で、その仕事に関わる様々な人と接するという観点から、＜教員の仕事＞×＜関わる人たち＞という枠組みからなる。具体的には、＜教員の仕事＞として「生徒指導・学級」「授業」「学校全体・行事その他」の3項目を横軸に配置し、＜関わる人たち＞として「子ども」「特別な支援を要する子ども」「教職員」「保護者・地域の人」の4項目を縦軸に配置して、合計12領域を設けた。この中に、学生がボランティアで「観察・実践したこと」と「学んだこと・身につけたこと」を事前に記述させ、「振り返り会」の自己省察および協働省察で活用した。学生の「評価シート」の記述では、学校現場の文脈に自身の身を置き、遭遇した問題状況などと対話しながら、その状況を変化させる方向性を吟味する過程が描かれており、課題への現実的な対応方法を見つけ出そうとする姿が浮かび上がった。一方で、学校現場への適応を目指すだけではなく、教育に影響を及ぼす多様で複雑な要因を見極め、教育の枠組みそのものを問い直すような力を育成するという観点から、「振り返り会」や「評価シート」を再検討することが今後の課題である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計4件)

長谷川哲也、教員を目指す学生による「学校現場体験」の再検討 静岡大学の実践を事例として、中部教育学会紀要、査読無、第17号、2017(印刷中)

長谷川哲也、教員養成における「学校支援ボランティア」の再考 S市小中学校教員への質問紙調査から、静岡大学教育実践総合センター紀要、査読有、第23号、2015、pp. 113-121
<http://doi.org/10.14945/00008893>

長谷川哲也、望月耕太、菅野文彦、教員養成における「学校現場体験活動」の意義に

関する検討(1) 原理的矛盾を抱える学校支援ボランティアをめぐる、静岡大学教育実践総合センター紀要、査読有、第22号、2014、pp. 91-101

望月耕太、長谷川哲也、菅野文彦、教員養成における「学校現場体験活動」の意義に関する検討(2) 各大学における学校支援ボランティア活動の名称の違いに注目して、静岡大学教育実践総合センター紀要、査読有、第22号、2014、pp. 103-110

〔学会発表〕(計5件)

長谷川哲也、菅野文彦、今津孝次郎、教員を目指す学生による「学校現場体験」の再検討 静岡大学と愛知東邦大学の実践を事例として、日本教師教育学会第25回研究大会、2015年9月20日、信州大学(長野県・長野市)

長谷川哲也、菅野文彦、望月耕太、教員養成における「学校現場体験活動」の再考 教員養成系大学・学部およびS市小中学校教員への調査から、日本教師教育学会第24回研究大会、2014年9月27日、玉川大学(東京都・町田市)

山本真人、菅野文彦、長谷川哲也、望月耕太、益川弘如、塩田真吾、島田桂吾、教員を目指す学生による「学校支援ボランティア」の動向と課題、日本教師教育学会第23回研究大会、2013年9月16日、佛教大学(京都府・京都市)

山本真人、梅澤収、菅野文彦、益川弘如、塩田真吾、長谷川哲也、望月耕太、島田桂吾、学生の「学校支援ボランティア」の実態と課題に関する研究 実践的指導力を育むための指導・評価システム構築に向けて、平成25年度日本教育大学協会研究集会、2013年10月5日、札幌全日空ホテル(主管校：北海道教育大学)(北海道・札幌市)

塩田真吾、益川弘如、山本真人、長谷川哲也、島田桂吾、望月耕太、菅野文彦、教員養成系大学・学部における「学校支援ボランティア」のWEB活用に関する状況の調査 WEBによる支援システムの構築に向けて、日本教育工学会第29回全国大会、2013年9月22日、秋田大学(秋田県・秋田市)

〔図書〕(計1件)

菅野文彦、梅澤収、山本真人、長倉守、益川弘如、長谷川哲也、塩田真吾、島田桂吾、望月耕太(静岡大学教育学部学校支援ボランティア研究会)、静岡学術出版、学校現場体験の明日を拓く 静岡大学教育学部における「学校支援ボランティア」の取り組み、2017、110

〔その他〕

ホームページ等

http://sunloftdev.heteml.jp/shiz_matching/wp-login.php?redirect_to=%2Fshiz_matching%2F

6. 研究組織

(1) 研究代表者

菅野 文彦 (SUGANO, Fumihiko)

静岡大学・教育学部・教授

研究者番号：30216288

(2) 研究分担者

塩田 真吾 (SHIOTA, Shingo)

静岡大学・教育学部・准教授

研究者番号：30547063

益川 弘如 (MASUKAWA, Hiroyuki)

静岡大学・教育学部・准教授

研究者番号：50367661

長谷川 哲也 (HASEGAWA, Tetsuya)

静岡大学・教育学部・准教授

研究者番号：90631854

島田 桂吾 (SHIMADA, Keigo)

静岡大学・教育学部・講師

研究者番号：20646674

山本 真人 (YAMAMOTO, Masahito)

静岡大学・教育学部・准教授

研究者番号：80609305

長倉 守 (NAGAKURA, Mamoru)

静岡大学・教育学部・准教授

研究者番号：20734205

(4) 研究協力者

望月 耕太 (MOCHIZUKI, Kota)